平安京左京八条三坊出土の銭鋳型

山本　雅和

1．はじめに

ＪＲ京都駅の周辺は、旧平安宮域と並んで京都市内でも最も高い密度で考古学的な調査を実施しているところである。特に1993年以降、京都駅ビル建築工事やその関連工事に先立って、頻繁に調査を実施するに至っている。本稿では一連の調査の中で出土した銭鋳型を紹介することとしたい[1]。

ＪＲ京都駅周辺は、平安時代は平安京左京八条三坊にあたっており、同時に鎌倉時代から室町時代にかけては東寺領・八条院町の故地でもある。これまでの調査においても平安時代後期から室町時代にかけての遺構・遺物を多数検出しており、調査成果を基にした景観の復原も試みられるに至っている[2]。中でもこの地を特徴付けるのは、工房や炉などの遺構、鋳型・金属滓・坩堝・ふいごの羽口などの遺物からうかがえる銅製品鋳造生産の盛行である。おそらくは他の手工業生産にも多数の住民が携わっていたはずだが、いままでの調査成果からは銅細工にかかわる痕跡が際立っている。

これらの鋳型は同種類のものがまとまって出土することが多く、鏡・仏具・刀装具などの鋳型が報告されている[3]。ところが、これまで銭鋳型は八条三坊七町出土の破片１点に留まっていた[4]。本稿で紹介する八条三坊三町出土の銭鋳型は京都では初めてのまとまった出土となる。そしてまた、八条三坊三町の調査と併行して行なった八条三坊六町の調査でも２点の銭鋳型の破片が出土しており、これらについては後にあわせて紹介することとする[5]。

2．銭鋳型が出土した土壙

銭鋳型が出土したのは、1994年６月から12月にかけて京都駅ビル別棟の立体駐車場建設予定地を対象として実施した調査である。調査区は左京八条三坊三町の北東部分にあたる（図１）。周辺の調査と同様、平安時代後期から室町時代にかけての溝・井戸・掘立柱建物・石敷遺構・柱穴・墓壙・土壙などを検出しており、町尻小路や八条坊門小路に面して建ち並んでいた家並みの景観を復原することができる。銭鋳型のほかにも鏡・刀装具・仏像の鋳型、坩堝・とりべ、

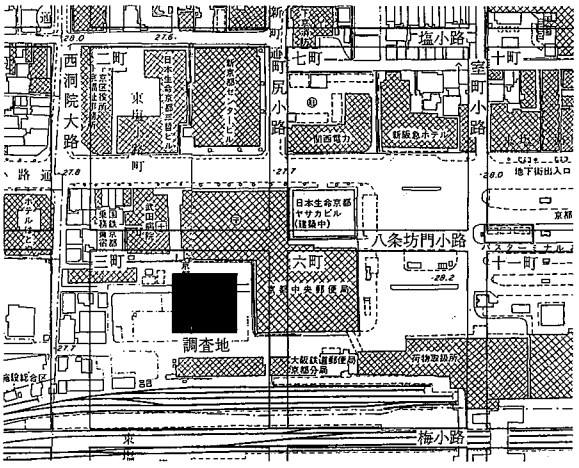

図１　調査位置図（１：5,000）

ふいごの羽口・炉壁の破片、細かい銅滓などが出土しており、ここでも銅細工が行なわれていたことは確実である。特に調査区西側の井戸の埋土からは多量の鏡の鋳型が出土した。

銭鋳型が出土した土壙は、調査区東側、町尻小路に面して出入口を開いていた家屋の裏手にあたる位置で検出した。近くには井戸・柱穴などの遺構があり、直径約55㎝の別の土壙と切りあっているが、相互の関係はよく分からない。規模は直径約70㎝・深さ約40㎝で、平安時代中期以前の流路跡を切り込んでいた（図２）。

埋土は上から黒褐色砂泥、黒色砂泥、黒褐色泥砂に分けることができ、上層には次節で詳述する橙色に焼けた板状の土製品がこぶし大の石とともに乱雑に堆積していた。しかしながら、土壙の調査中には銭鋳型を確認することはできておらず、埋土全体に多量の焼土粒を認めたため、埋土を持ち帰って洗浄し、篩を通して初めて銭鋳型の存在を知るに至った。篩がけを行なったため５㎜角程度の細かい破片も採集することができている。鋳型は上層と中層に含まれており、両者の間には出土量の違いは認められなかった。おそらく、この土壙は一連の作業の中で埋め立てられたものであろう。また、壁などに火をうけた痕跡がないので、炉ではなかったと考えている。

土壙からは他にも土師器の皿などの土器類が出土している。大部分は細片で図化出来たのは土

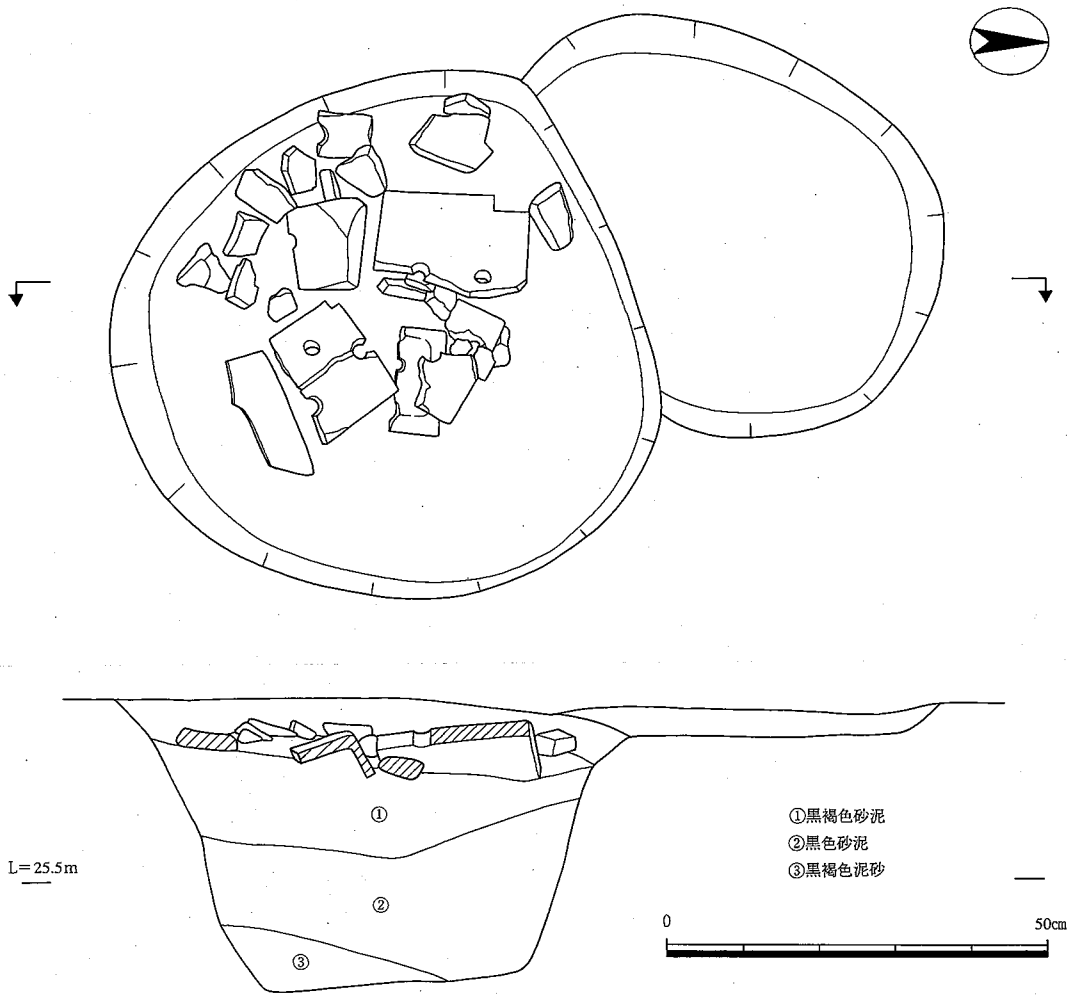

図２　銭鋳型出土土壙実測図

師器の皿２点のみである（図３）。１がにぶい黄褐色で雲母を多量に含むのに対して、２は灰白色で雲母がやや少ないという違いがあるが、内湾気味の口縁端部や内外面の調整技法の一致から同時期の所産と判断でき、これまでの京都出土土器の年代観によれば、この土壙の埋没した時期は13世紀後半になる[6]。図化していない他の土器類の年代観もこれと矛盾しない。したがって同時に出土した銭鋳型も同じ頃に使用されたと推定できる。

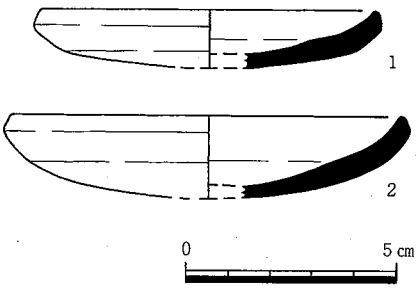

図３　土師器皿実測図

３．出土した銭鋳型

出土した銭鋳型は大部分が小破片に割れて出土しており、完形に復元することはできなかった。しかし、個々の破片の形状を総合すると、銭面の中央に幹線の湯道がとおり、両側に銭部とそれらを繋ぐ支線の湯道を配する形を復元することができる。また、鋳型には銭面が片面にしかないもの（図４・５・６）と両面にあるもの（図７）があり、前者をＡ類、後者をＢ類として説明を進める。

鋳型Ａ類はさらに、銭部に銭銘のないＡ１類と銭銘のあるＡ２類に細分できる。今回の調査ではＡ２類は１点確認したのみであり（Ａ類－９）、他のＡ類は全てＡ１類であった（Ａ類－１～８）。Ａ１類は最大の破片で長さ18.6cm、幅8.5cmある（Ａ類－８）[7]。幅が分かる他の２点の破片でも約８cmである。いずれの個体も端部が反り上っており、そのため端部が欠けていることが多い。厚さは1.5cmから２cmあり、粗土のうえに３mmから８mmの厚さで真土を重ねる。中には粗土を丁寧にくぼめた部分に真土を充填している個体もある（Ａ類－６・７）。粗土の部分は直径約１mmから３mmの白色粒を中心とした砂粒を多く含んでおり、さらにスサとして多量の籾殻が混ぜてある。色調は淡橙色から黄灰色でよく焼き締まっている。一方、真土の部分には直径約0.5mmの非常に細かい白色粒が含まれており、加えて表面には多量の雲母を撒いている。また、色調は黒色から橙色で粗土の部分に比べてやや焼きがあまい。こうした色調の違いは鋳造の際の湯の流れ具合の影響を受けたものと考えられる。銭面の反対側は、端部に向かって緩やかな丸みをもって形作られている。表面にはやや凹凸があり、成形段階の指の圧痕らしきものも認めることができるが、大部分は丁寧なナデによって調整してある。

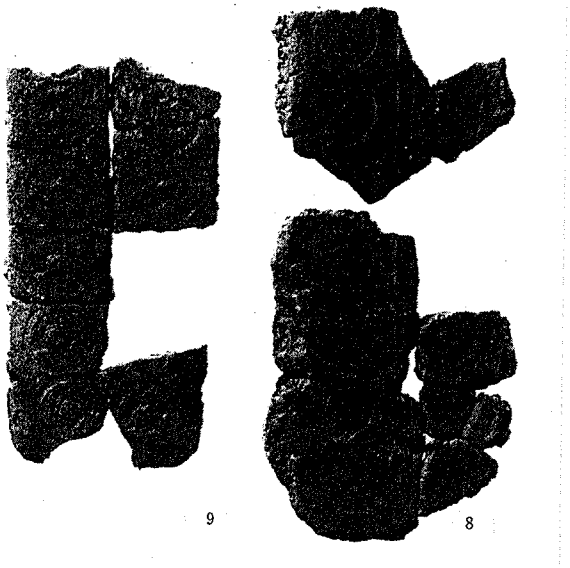

図４　銭鋳型Ａ類

Ａ類－１・２は湯口の破片、Ａ類－６～８

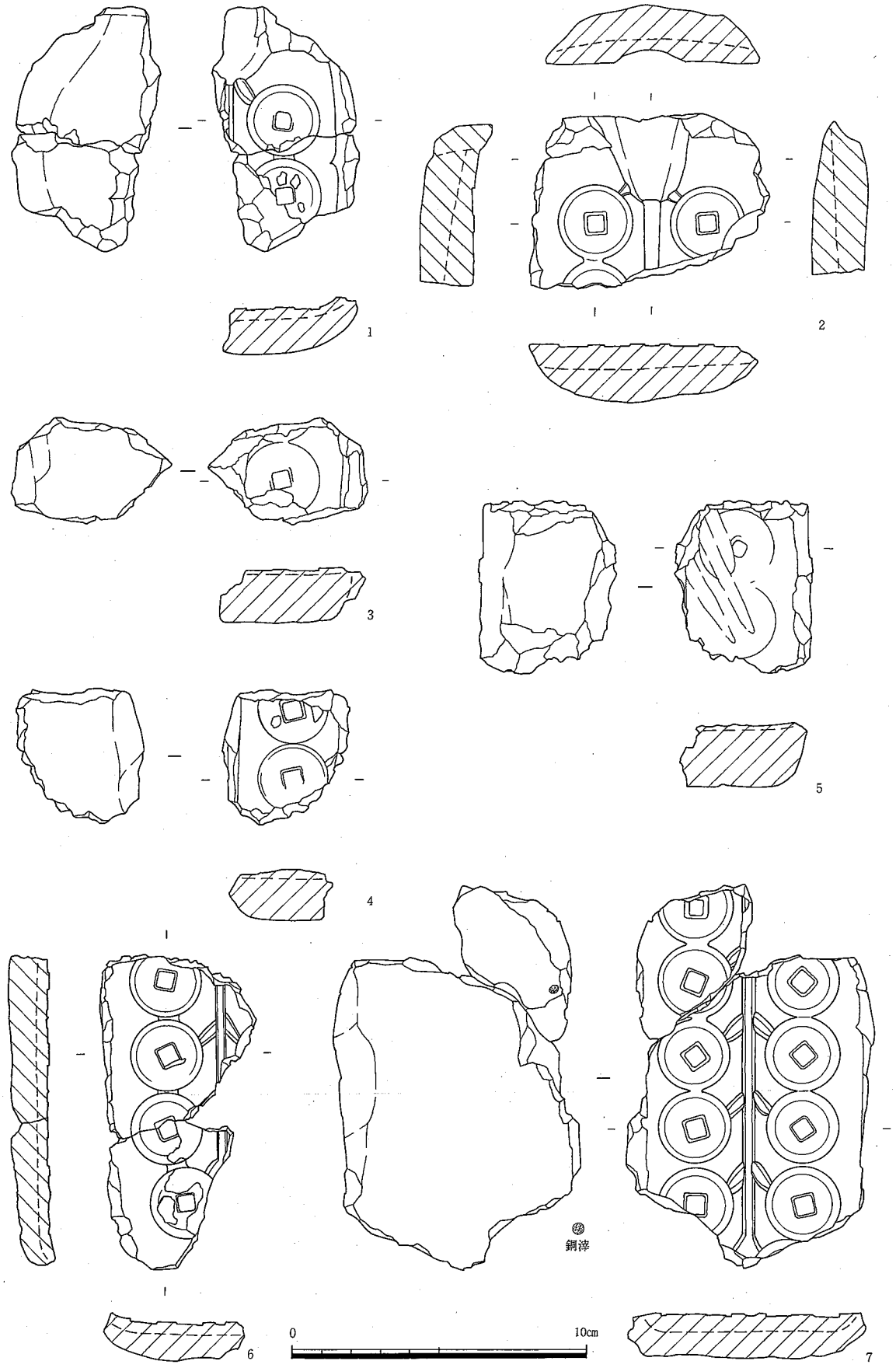

図５　銭鋳型Ａ類実測図（１）

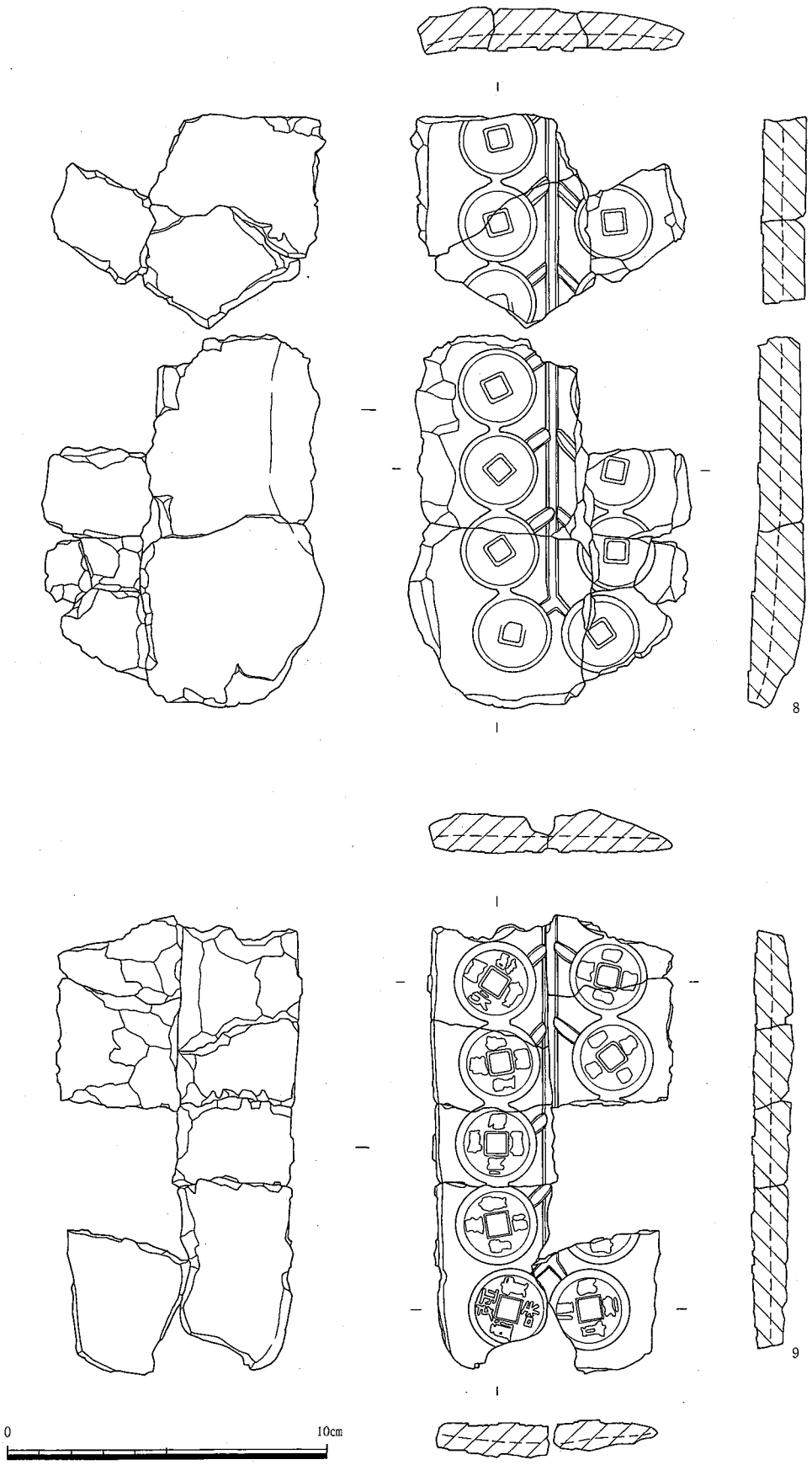

図６　銭鋳型Ａ類実測図（２）

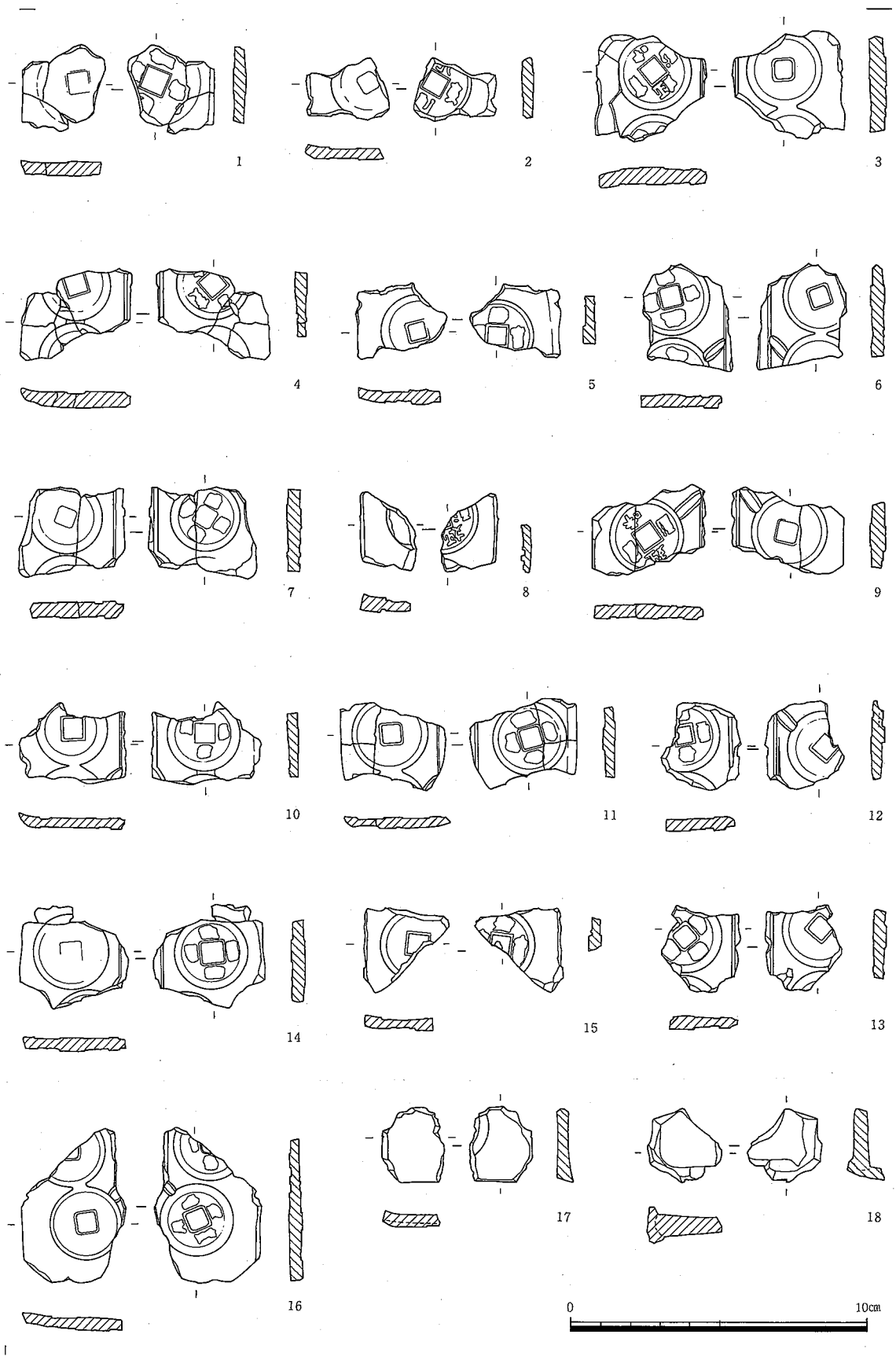

図７　銭鋳型Ｂ類実測図

は先端部を含む破片である。湯口は端部に向かって開く形をしており、先には幅５㎜、深さ１㎜から２㎜の幹線の湯道が加工してある。また、幹線の湯道の両脇にも両側の銭部につながる幅３㎜から５㎜、深さ１㎜の支線の湯道が配置してある。一方、先端部では幹線の湯道が二股に枝別れして両側の銭部につながっている。そのため先端部の２つの銭部の間隔は他の部分よりも少し狭くなる。

これらに挟まれた中間の部分では、幹線の湯道を挟んだ両側に、上下に相接する状態で銭部が並ぶ。接する部分は個々の銭部の輪郭が合わさったり（Ａ類－２・７・８）、輪郭が独立していても近接する部分が周囲よりもわずかに低くなるように加工してある（Ａ類－１・６）。銭部の直径は2.4㎝から2.6㎝で、外縁・内郭部分の段の微妙な痕跡を認めることができる。銭部の向きには法則性を看取できない。最も大きい破片であるＡ類－８では銭面に14枚の銭部があったことが確認できる。これにはさらに最低でも湯口部分に２枚の銭部があるはずなので、一つの銭面には16枚以上の銭部が並んでいたことになる。

幹線の湯道は湯口から先端部に向かって真直ぐにのびる。幅・深さも一定である。これから両側の銭部にほぼ45度の角度で支線の湯道がつながる。支線の湯道は幅２㎜から５㎜、深さ0.5㎜から１㎜で、銭部に接する部分ほど細く、逆に幹線の湯道に接する部分では太くなり、部分的に輪郭を壊している。こうした特徴から銭面の加工の手順は、銭部と幹線の湯道を加工した後、支線の湯道の部分を工具で抉ることによって行なわれたと考えることができる。

なお、Ａ類－３～５は真土が非常に薄く、そのため銭部もわずかなくぼみを持つだけのやや異なった破片である。Ａ類－５では粗土の部分のタタキ状の加工痕が浮き出してしまっている。このままでは鋳型としての用を成さないので、あるいはもう一回塗り重ねられていた真土が剥離したものかもしれない。そうすると真土の部分の成形が２段階で行なわれたことになる。

Ａ２類は先端部を含む破片である。長さ14.4㎝・幅7.7㎝で、先端部の幅は6.6㎝と幾分狭くなっている。厚さは0.9㎝から1.2㎝でＡ１類に比べると少し薄い。特に先端部ほど薄さが目立つ。また、端部はＡ１類と逆の方向にわずかに反っている。しかし、こうしたいくつかの違いはあるが、他の特徴はＡ１類と共通している。

鋳型Ｂ類は５㎜程度の厚さしかないため、その多くが一辺１㎝から２㎝ほどの細片に砕けていた。厚さは一定で、銭部は平坦だが、端部は片側に反っている。直径約0.5㎜の非常に細かい白色粒を含む真土のみで作ってあり、表面には両面とも多量の雲母が撒いてある。色調は全体が黒灰色をしている。いずれの破片も一方の面の銭部には銭銘があり、もう一方の面の銭部には銭銘がない。端部は銭銘のない方に反っている。銭部の直径は大部分が2.4㎝から2.6㎝で、中には直径約３㎝に復元できるやや大型の銭部をもつ破片もある（Ｂ類－１）。ほとんどの破片で外縁・内郭部分の段を観察することができた。湯口に当たる破片は確認していないが、先端部の破片はあり（Ｂ類－14～18）、銭部の配置の仕方はＡ類と同じであったと推定できる。同様に銭面の加工技法もＡ類と同じであったことが観察できるが、厚みの中ほどで真土が剥離している破片もあるので（Ｂ類－12・16）、成形は２段階で行なわれた可能性がある。

図８　鋳型銭銘（いずれも銭鋳型Ａ類－９より　約1.5倍に拡大）

銭銘の多くは摩耗しており、判読できた銭銘は次のものがある。

Ａ類－９（図８）：「政和通寶」・「紹圓元寶」・「元圓通寶」・「元圓通寶」、Ｂ類－２：「元□通寶」、Ｂ類－３：「政和通寶」、Ｂ類－４：「□□□寶」、Ｂ類－５：「□□□寶」、Ｂ類－８：「政□通□」、Ｂ類－９：「政和通寶」、Ｂ類－15：「□□□寶」、Ｂ類－16：「□□通寶」。いずれも11世紀後半から12世紀はじめにかけて北宋で鋳造された銅銭銘である。判読出来た銭銘には政和通寶が多いが、Ａ類－９に見られるように特定の銭銘の銅銭を揃えて鋳造する意識はなかったようである。また、銭銘や外縁・内郭部分の段の痕跡から、これらは実物の銅銭を押し付けて加工されたとみてよい。なお、鋳返しによる鋳縮みはよくわからない。

次に鋳型から分かる銭の鋳造技法について検討する[8]。まず、鋳型の製作手順では、最初に粗土でおおよその形を作り、その上に真土を数㎜の厚さで重ね、平らに成形する。この作業は２回行なわれたかもしれない。そして、真土の上面に剥離材として雲母を撒いた後、中央部に幹線の湯道となる棒状の工具とその両側に実物の銅銭を並べて押し付ける。これが鋳型Ａ類になる。その上に雲母を撒き、真土を塗り付ける。あるいは表面に雲母を散らした薄い板状の真土をあてがったのかもしれない。その上にもう一度真土を重ね、平らに成形し、雲母を撒き、棒状の工具と銅銭を押し付ける。これが鋳型Ｂ類になる。鋳型Ｂ類を作る作業を数回繰り返した後、最後に真土の上に粗土を盛り上げて鋳型Ａ類を成形する。このあと乾燥がすすんでからそれぞれを分解して銅銭などを取り外し、支線の湯道と銭部の接合部を加工する。最後に焼成の工程を経て鋳型の出来上がりとなる。なお、鋳型Ａ１類とＡ２類の前後関係については確定できていないが、Ａ１類には粗土をくぼめた部分に真土を充填している個体がある（Ａ類－６・７）、Ｂ類－12には銭銘のない方の銭面の幹線の湯道の横に棒状の工具を置き直した痕跡がある、という２点からＡ１類が先行する可能性が高い。Ａ１類の反り上った端部に対応して、その次のＢ類の端部も反ったのであり、その結果、Ａ１類の反対側になるＡ２類は、Ａ１類と逆向きの反りをもつと同時に幅も狭くなってしまったのである。したがって鋳型は徐々に幅を狭めながら製作されたことになり、最初に製作されるＡ１類の幅が、鋳型全体の大きさを規定したこととなる。

鋳造にあたっては、鋳型の製作手順通りに鋳型Ｂ類を鋳型Ａ類の間に挟んで使用した。出土した破片の量から推定すると一組の鋳型Ａ類の間に２枚くらいの鋳型Ｂ類が組み合わさると考えられる。Ｂ類－18は先端部の破片であるが、丁度、角にあたる部分の側面に鋳型とは直交して粘土

が付着していた。粘土の組成は鋳型A類の粗土に近似している。土壙からは細い溝状のくぼみをもった同様の小片も出土しており、鋳型から剥落したものと考えたい。鋳型を組み合わせる際には隙間のできる側面にも粘土を塗り付けたものと推定できる。こうして組み立てた鋳型を何かで緊縛した後、湯を流し込む。湯は湯口から幹線の湯道を通りながら支線の湯道を伝わって両側の銭部に配される。同時に湯口に作られた支線の湯道からも銭部に湯が流れ、順次、銭部で支線の湯道からの湯と合流しながら、銭部の接合部の隙間を通って先端部に達する。これは銭部の端まで湯が行き渡るようにするための工夫であろう。しかしながら、A類－9では鋳型の色調から先端部にまで湯が及ばなかったことが確認できる。完全な鋳造はさぞや難しかったことであろう。また、A類－7の表面には鋳造の際に飛び散った銅滓が付着しており、飛沫が飛び散る当時の作業の様子を彷彿とさせる。鋳造直後は湯道や銭同士がつながった「枝銭」の状態にあるのでこれらをタガネなどで切り放して、切断部分やバリを砥石で整形して、ようやく銭の出来上がりとなる。調査では細い溝状の切れ込みをもつ砥石が出土しており、なかには銭の整形に利用されたものがあったかもしれない。そして、残った湯道の部分や鋳損ないの銭は次回の原料として利用されたと推測できる。

さて、前節でも触れたように銭鋳型とともに板状土製品が同じ土壙から出土している。出土状況からみて、銭鋳型と密接な関係があることが明らかなので、ここに合せて紹介することとしたい。

板状土製品も大部分が小破片に割れて出土しており、接合作業の結果、14片を確認することができた。そのなかで比較的大きくて元の形が推定できる個体を図示した。色調は橙色から淡橙色を基調としながら、部分的に灰色や黄灰色を呈し、固く焼け締まっている。色調の違いは使用時の火の当たり具合の影響を受けたものであろう。胎土は直径約1㎜から5㎜の白色粒を中心とする砂粒・小礫と雲母を多量に含んでいる。また、多量の籾殻がスサとして混ぜてある。

板状土製品には完全な板状のもの（図9）と幾分丸みをもって直角に折れ曲がるもの（図10）がある。前者をa類、後者をb類とする。

板状土製品a類は厚さ約1.5㎝から約2㎝で、a類－1のようにわずかに反りをもつ個体もあるが、基本的に平坦に作られている。完全に復元できた個体はなく、a類－2のみ残存部分から長辺24.5㎝・短辺14.8㎝の長方形であったことが推定できる。ほとんどの個体には直径約2㎝の円形の穿孔がある。a類－1では5か所確認できた。鋭い刃物で両面から穿っている。また、a類－3では中央に幅約2㎝の枘穴状の切り込みがある。これはa類－4のような角の枘状の出張りに対応するものであろう。

次に製作技法に注目すると、いくつかの個体の側面に明瞭な切断痕を観察することができた。一方、a類－3のように、幅約1㎝から2㎝の粘土紐を押し付けた痕跡がくぼみになって残っている個体もあった。ただし、断面では粘土紐を重ねたような痕跡は認めていない。したがって、程々の大きさの粘土板の不要部分を切り取ったり、不足部分には粘土紐を継ぎ足したりすることによって四角く成形したことが分かる。調整は何れの面も不定方向の丁寧なナデである。a類－4では板目の圧痕とハケメを認めた。これらとナデとの前後関係は分からない。調整のあと、多

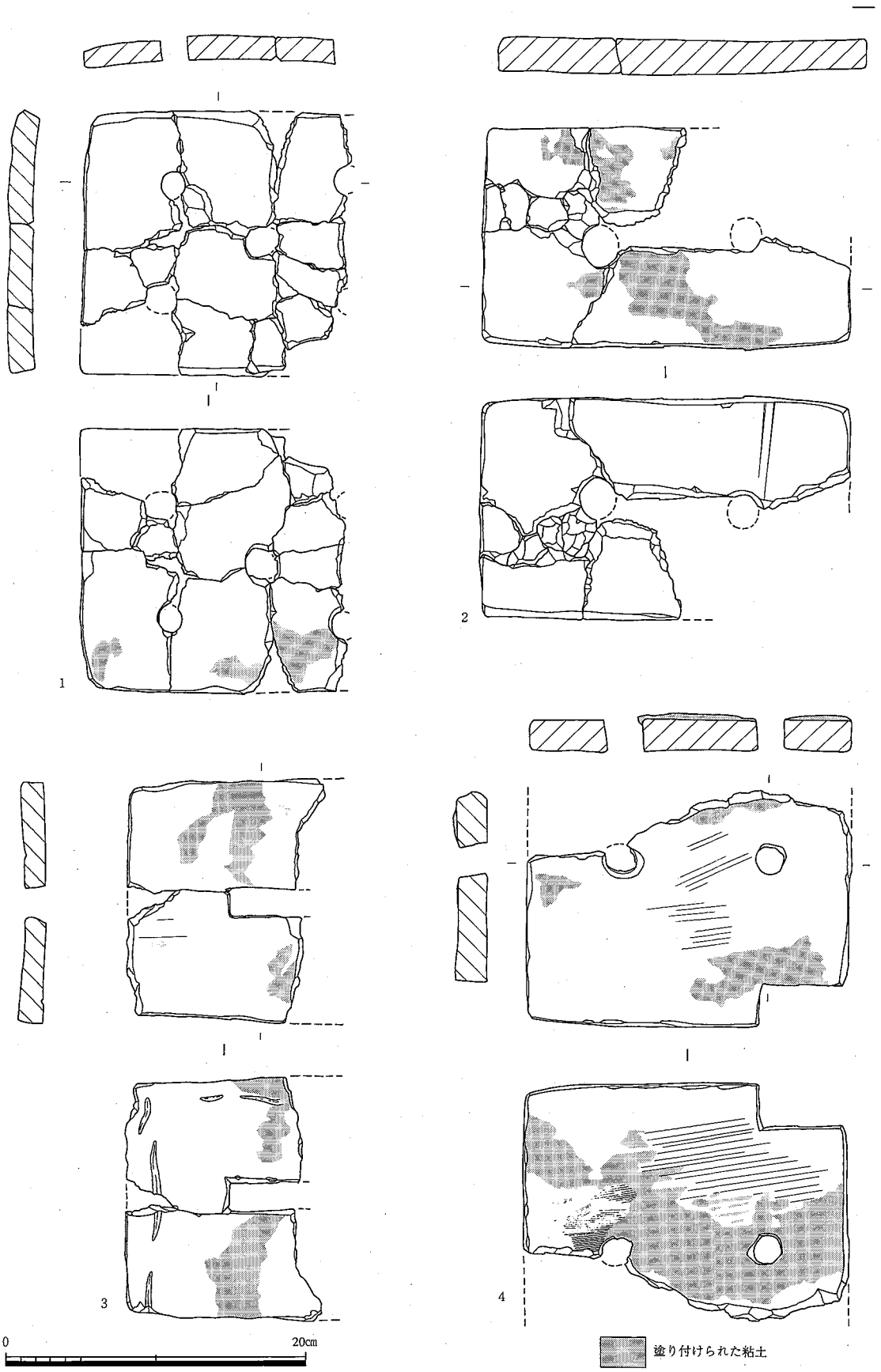

図９　板状土製品ａ類実測図

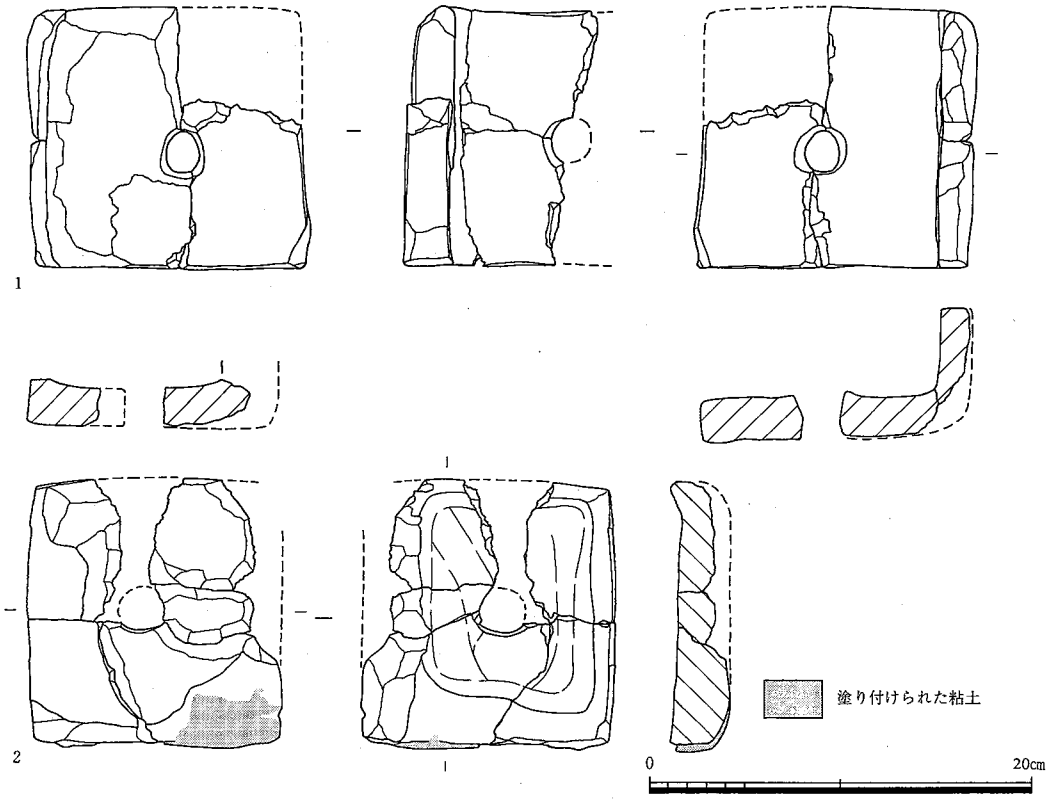

図10　板状土製品ｂ類実測図

くの個体では表面にきめの細かい粘土が塗り付けてある。粘土にはスサは全く含まれていない。厚いところでは１㎝近くにもなる。あるいは先に指摘した板の圧痕やハケメはこの粘土の「のり」を良くするための工夫とも考えられる。しかしながら、この粘土の塗り付け作業は部分的なもので法則性は看取できない。用途は不明である。

板状土製品ｂ類は２点のみ確認した。厚さは約2.5㎝から３㎝あり、ａ類より分厚い。一つの面の大きさは一辺約14㎝のほぼ正方形に復元できる。もう一面は破損のため分からない。いずれも中央に１か所直径約２㎝の円形の穿孔がある。なお、ｂ類－１はＬ字形の側面の一つが平坦に仕上げられているので、図示した向きに立てて使用されていたと推定できる。

成形・調整技法はａ類と基本的に同じである。角の部分はａ類と同様の粘土板を折り曲げて加工している。ｂ類－１は、角の外側がひどく剥離しており、これは折り曲げの時に力が加わった影響かもしれない。ｂ類－２では側面以外の内面の周囲部分を面取りしているが、これは、厚さをそろえるための加工であろう。また、ａ類と同様に調整後部分的に粘土を塗り付けている。

さて、この板状土製品の使用法だが、現在のところ、ほとんどよく分からない。唯一、ｂ類－１のみ、正立の状態が分かるだけで、他の個体では使用時の向きも分からない。枘状の出張りと枘穴状の切り込みは組み合わせることを目的としていることは確かである。一方、円形の穿孔はａ類－２と４やｂ類－１と２のように、位置や相互の間隔が一致する個体を重視すると心棒を通して組み合わせたものとも考えられるし、ａ類－１のように多孔質の個体を重視すると通気を目的としたものとも考えられる。これ以上の使用法は考えつかない。しかしながら、平安京域の他

の調査で鏡の鋳型と共伴して同様の板状土製品が出土した例もあり、鋳造作業の何らかの段階で使用された遺物であることは間違いない。今後の類例の増加を待ちたい。

4．他の銭鋳型との比較

まず、京都出土の銭鋳型を紹介する（図11)。図11－３は左京八条三坊三町に近接する八条三坊七町から出土した鋳型である。14世紀中葉の遺構から１点のみ出土している[9]。両面に銭面があるので今回の分類ではＢ類になる。しかしながら、厚さは８㎜から９㎜もあり、三町出土のＢ類よりかなり厚い。片面に銭銘があり、反対の面に銭銘がないことは同じである。銭銘は「和」と「通」が読めるので「政和通寶」と考えられている。

図11－１・２は八条三坊六町から出土した鋳型で、今回初めて報告するものである。それぞれ14世紀中葉の別々の柱穴から出土した。図11－１は片面に銭面をもつので今回の分類ではＡ類になる。しかし、厚さは５㎜に満たず、真土のみで作られており、色調も黒灰色を示す。両面には多量の雲母も撒かれている。こうした特徴はむしろＢ類に共通するもので、銭面の反対側が見事に平坦である点も三町出土の鋳型にはみられない特徴である。鋳型の中では中間部分に相当する破片と考えられ、幅５㎜、深さ２㎜の非常にしっかりした幹線の湯道と直径2.5㎝の銭部を確認することができる。銭部には銭銘の痕跡があるが、全く判読できない。支線の湯道が幹線の湯道と直交して加工してあることも三町出土の鋳型にはなかった特徴である。

図11－２も片面に銭銘のない銭面をもつ破片である。やや薄いが、スサに籾殻を混入した粗土と直径約0.5㎜の白色粒を少量含む真土で作られており、銭面には多量の雲母が撒いてある。銭銘はない。これらはＡ１類の特徴と一致している。真土の赤変の具合から先端部の破片であると推定でき、直径2.4㎝の銭部が２枚残っている。三町出土のＡ１類との相違は、厚さが約１㎝と薄いことと銭面の反対側が平坦であることの２点である。

なお、図11－４は八条三坊六町の井戸から出土した滑石製品である。これも14世紀に属する。平面形は緩やかな円弧を描き、側面は非常に平滑に仕上げてあるので、滑石製の鍋の鍔の部分を加工したものであると考えられる。比較的平坦な方の面にはコンパス状の工具を用いて円が彫り込んである。一部で円が途切れたりいびつになるのは表面の凹凸のせいで、コンパス状の

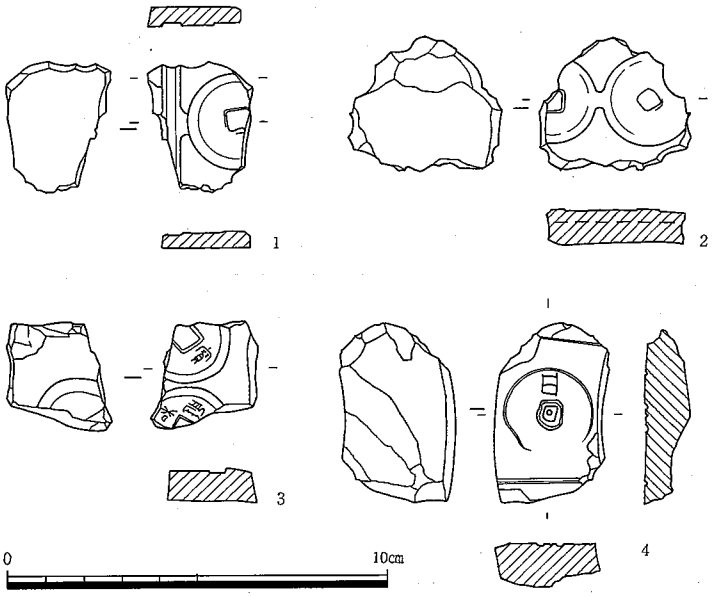

図11　六町・七町出土銭鋳型・滑石製品実測図

工具を用いたことは中央に支点の穴があいていることから分かる。その内側にはフリーハンドで方形の穿孔を意識した加工痕があり、両者の間には「日」とも読める浅い線刻が施される。ただし、意味は明らかではない。また、上下に切り込みの加工もあるが、この用途も分からない。この製品は表面の凹凸や不鮮明な加工からみて決して鋳型として使用できたとは考えられず、熱を受けた痕跡がないこともそれを裏付ける。しかしながら、銭鋳型を意識した製品と考えられるので、ここに合せて紹介した。

銭鋳型は京都以外では鎌倉と堺から出土が報告されており、それぞれについて宗臺秀明氏[10]と嶋谷和彦氏[11]が研究成果を発表している。本稿は両氏の論稿に負うところが大きい。

鎌倉では今小路西遺跡の調査で銭鋳型が出土した[12]。時期は15世紀初頭に属する。残念ながら破片が細かく、全体の形状も分からないが、縁が丸く、断面が山形で、厚さ1㎝以上で、片面にのみ銭面があるものと、縁が直線で、断面が板状のものの2種類に分類されている。後者はさらに銭面が片面のみで厚さ1㎝内外のものと、両面とも銭面で厚さ0.5㎝ほどのものに細分されている。前者は「単品鋳造鋳型」、後者は3枚以上の鋳型を重ねる「大量生産用の鋳型」と評価されている。鋳造された銭の大部分は中国で唐から北宋時代にかけて鋳造された銭の模鋳銭である。また、鋳型の総重量は7.5kgで三町出土の銭鋳型にくらべて格段に多い。

堺では環濠都市内の6か所で銭鋳型や湯道のバリ・銭の未製品が出土している[13]。いずれも16世紀中頃から後半に属する。鋳型の形態は基本的には三町出土のものと同じだが、次のような細部に違いがある。鋳型の幅が約6.4㎝と三町出土鋳型よりも狭い、片面にのみ銭面を持つ鋳型の厚さは1㎝程度しかない、幹線の湯道と支線の湯道が直交している、銭銘のない方の面の圧痕が非常に弱いなどといった点である。むしろ、六町出土の銭鋳型のほうが似ているようである。また、模鋳銭にくわえて無文銭も鋳造されていた。出土量は鎌倉と比べても圧倒的に多い。

5．まとめ

以上、平安京左京八条三坊三町出土の銭鋳型について述べてきた。まとめると次のようになる。

①銭鋳型の年代は13世紀後半に属する。模鋳銭の鋳型としては、現段階で最も古い。

②銭鋳型は片面に銭面を持つもの（A類）の間に、両面に銭面を持つもの（B類）を挟んで用いられた。また、板状土製品も鋳造工程のなんらかの段階に使用されたと推定できる。

③銭鋳型の製作や鋳造には歩留まりをよくするための様々な工夫が凝らされた。しかし、全ての鋳造が成功したとは言い難い。

④鋳造された銭は全て中国銭の模鋳銭である。

⑤銭鋳型の出土量から小規模な生産でしかなかったと考えざるを得ない。おそらくは鋳型の出土量の多い鏡や仏具の生産者が何らかの特別な契機に生産したものと考えられる。

中世の模鋳銭生産ついては、宗臺氏・嶋谷氏がそれぞれの論稿で歴史的評価を行なっている[14]。嶋谷氏の表現を借りれば、京都・鎌倉は「技術力優先型」、堺は「資本力主導型」ということになる。今回紹介した八条三坊三町並びに六町出土の銭鋳型も出土量や遺跡のなかでの位置付けを

みるかぎり、いまのところこの見解を覆すものではない。

しかしながら、鋳型の特徴には時代や出土した都市によりいくつかの違いがあることが明らかとなってきた。あるいは技術の系譜関係の解明がすすめば、生産者の系譜関係を明らかにする手掛かりになるかもしれない。また、八条院町内での立地や平安京・中世京都の鋳物生産の展開の中での位置付けをより詳細に検討することにより、生産者の社会的な立場を明らかにすることも可能だろう。左京八条三坊周辺の調査は現在も進行中であり、今後の調査成果に期待していただきたい。

本稿の成稿にあたっては、ともに調査を担当した鈴木廣司、小谷裕、布川豊治の３氏をはじめとして京都市埋蔵文化財研究所職員の諸氏および次の方々から多くのご教示を頂いた。記して感謝の意を表します。

伊藤純・内田俊秀・馬瀬智光・久保智康・桜木晋一・嶋谷和彦・玉井哲雄・永井久美男（敬称略）

註

（１）調査全体の概要については次の文献を参照していただきたい。

ａ「平安京左京八条三坊　１」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年。

ｂ網伸也・山本雅和「平安京左京八条三坊の発掘調査」『日本史研究』409　1996年。

（２）玉井哲雄・堀内明博「職人と商人の町・京都七条町界隈」『朝日百科日本の歴史別冊　歴史を読みなおす６　平安京と水辺の都市、そして安土　都市の原点』朝日新聞社　1993年。

（３）ａ『平安京左京八条三坊（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第６冊）』（財）京都市埋蔵文化財研究所　1982年。

ｂ『平安京左京八條三坊二町（平安京跡研究調査報告第６輯）』（財）古代学協会　1983年など。

（４）註（３）ａに同じ。

（５）六町の調査成果については註（１）ｂのほか「平安京左京八条三坊　２」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所を参照のこと。なお、一連の調査で出土した鏡鋳型については網伸也氏が本号で報告している。あわせて参照していただきたい。

網伸也「和鏡鋳型の復原的考察　－平安京左京八条三坊三町・六町出土例を中心に－　」『研究紀要』第３号　（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996年。

（６）小森俊寛「消費地の様相＜平安京＞講義資料」『奈良国立文化財研究所　中近世窯業調査課程資料』1990年。

（７）Ａ類－８は２つの破片が直接は接合しないが、形態・色調の変化の具合などの特徴から同一個体とみて間違いない。接合できない部分の大きさは銭部の直径から復元した。

（８）この部分については、嶋谷和彦「堺出土の銭鋳型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』永井久美男編　兵庫埋蔵銭調査会　1994年を参照した。

（９）註（３）ａに同じ。

（10）ａ宗臺秀明「中世の模鋳銭と社会　－鎌倉の事例を中心として－」『中世都市研究』第３号　1994年。

b宗墓秀明「鎌倉の模鋳銭」『中世の出土銭－出土銭の調査と分類』永井久美男編　兵庫埋蔵銭調査会 1994年など。

(11) 註（7）および嶋谷和彦「中世の模鋳銭生産　－堺出土の銭鋳型を中心に－」『考古学ジャーナル』№372　1994年など。

(12)『今小路西遺跡　由比が浜一丁目２１３番地３地点』今小路西遺跡発掘調査団　1993年。

(13) a「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－堺市甲斐町東４丁　ＳＫＴ271地点－」『堺市文化財調査概要報告第23冊』堺市教育委員会　1991年。

b「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－堺市大町西１丁　ＳＫＴ344地点－」『堺市文化財調査概要報告第23冊』堺市教育委員会　1992年。

c「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－堺市宿院町西１丁・ＳＫＴ354地点－」『堺市文化財調査概要報告第33冊』堺市教育委員会　1992年。

d「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告－堺市宿院町西１丁　ＳＫＴ346地点－」『堺市文化財調査概要報告第38冊』堺市教育委員会　1993年。

e「堺環濠都市遺跡－ＳＫＴ500地点・堺市材木町西１丁－」『平成６年度国庫補助事業発掘調査報告』堺市教育委員会　1995年。

f「発掘ニュース№４　堺環濠都市遺跡（ＳＫＴ78)」『堺埋蔵文化財だより』№４　堺市立埋蔵文化財センター　1992年。

(14) 註（10）・（11）に同じ。